

指導資料



鹿児島県総合教育センター

教育相談 第127号

—小・中・高等学校対象—

平成22年4月発行

学習に苦戦している児童生徒を支える教育相談

本県の平成21年度全国学力・学習状況調査結果をみると、3割程度の児童生徒が授業内容の理解に難しさを感じている。これまで学校では、教科指導法の改善等、分かる授業に重点を置いた取組がなされてきた。

しかし、授業内容の理解の難しさのほかに、様々な要因から学習に不安や悩みを抱えている児童生徒も少なくない。

そこで本稿では、様々な要因から学習に不安や悩みを抱えている児童生徒を「学習に苦戦している児童生徒」ととらえ、それを支える教育相談の進め方について述べる。

1 本県の児童生徒の実態から

図1は、平成18年度に当教育センターが実施した本県の「児童生徒が不安を感じる原因」に関する実態調査の結果である。

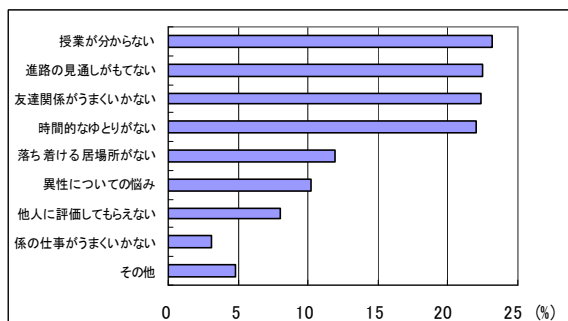


図1 児童生徒が不安を感じる原因

〔調査対象：小学6年生613人，中学3年生469人，
高校1年生513人，合計1595人 複数回答〕

児童生徒が不安を感じる原因として「授業が分からない」、「進路に見通しがもてない」という回答が上位であった。

また、平成20年度当教育センターにあった学業・進路に関する電話相談の主な内容は、次のとおりである。

- 「勉強をしたいという気持ちがわからない。」
- 「いくらやっても駄目なものは駄目なのに、どうして勉強をしなければならないの。」
- 「勉強する意味がわからなくなった。」
- 「毎日欠かさず宿題をしていくのに成績が上がらない。」
- 「自分が希望して入学した学校であったが、思い描いていた学校とは違っていた。」

このように児童生徒が、学業・進路に関して、不安に思ったり、悩んだりする内容は様々である。

学習に不安や悩みを抱える児童生徒は、ストレスが溜まったり、自己肯定感が低下したりするなど、心理的に不安定な状態に陥りやすい。また、そのような不安定な状態が、不適応行動を引き起こす場合もある。

そこで学校においては、学習に苦戦している児童生徒の理解を深め、積極的に児童生徒を支える教育相談を行うことが必要である。

2 学習に苦戦している児童生徒の理解

学習に苦戦する要因は様々であり、学校においては、その要因を踏まえて児童生徒を理解する必要がある。ここでは、児童生徒が抱える主な要因を示す。

(1) 認知的要因

自分についての誤ったとらえ方や思い込みなど

(2) 情緒的要因

何らかの理由による学習に対するマイナス感情など

(3) 行動的要因

学習方法、学習習慣が身に付いていないなど

3 学習に苦戦している児童生徒への対応

児童生徒への基本的な対応においては、不安や悩みを受け止め、共感的理解に努めながら、指導・援助することが必要である。

次に、前述した児童生徒が抱える主な要因への対応のポイントを示す。

(1) 認知的要因への対応のポイント

【自己肯定感の高揚を促す】

- ・ 「自分にはできない」と思っている場合は、積極的に「できている」面を認め、伝える。
- ・ 思うような結果が出ずに苦しんでいる場合は、積極的に「努力している」面を認め、伝える。

【明るい将来をイメージできるようにする】

- ・ 自分の将来に向けたプラスのイメージをもてるようにし、自己の可能性への気づきを促す。
- ・ 進路に関する様々な情報の提示により、自己の適性について肯定的に考えることができるようにする。

【誤ったとらえ方や思い込みを修正する】

- ・ 「～でなければならない」との誤ったとらえ方や思い込みを解きほぐし、もの見方、考え方を広げる。

(2) 情緒的要因への対応のポイント

【学習に対する興味・関心を引き出す】

- ・ 児童生徒の得意分野に関連した話題や学習をきっかけに、学習に対するマイナス感情を緩和していく。

【達成感をもつことができるように支援する】

- ・ チャレンジしやすい課題を設定することによって、達成感を味わう機会を増えるようにする。ただし、児童生徒の自尊感情を損なわないように十分配慮する。

【学級における人間関係づくりを促進する】

- ・ 開発的カウンセリングの技法を活用するなどして、学級における明るく共感的な人間関係づくりを促進し、授業における児童生徒の不安や緊張を軽減する。

【温かくかかわりながらサポートしていく】

- ・ 授業の中で、温かい声かけをするなどして日常的にサポートし、学習への意欲を喚起する。

(3) 行動的要因への対応のポイント

【自己の課題への気づきを促す】

- ・ 現在の自分の学習の仕方について振り返る機会をつくり、改善すべき自己の課題への気づきを促す。

【「できる」目標の積み重ねによる解決を促す】

- ・ 自己の課題への気づきに基づいて、実現可能な目標を設定し、スモールステップで少しずつ解決することができるようにする。

【プロセスごとに評価して学習意欲を喚起する】

- ・ 取組の結果だけではなく、その過程をとらえて肯定的に評価し、児童生徒の学習意欲を喚起する。

【基本的なスタディスキルの獲得を促す】

- ・ 予習、復習、宿題への取組方や授業の受け方など、具体的に簡潔な説明や指示を行い、基本的なスタディスキルを段階的に獲得していけるようにする。

4 児童生徒への対応の実例

(1) 個人面談による対応

個人面談においては、学習に苦戦する児童生徒の抱えるそれぞれの要因を踏まえて指導・援助の方針を立て、教育相談を進めていく必要がある。

次に、各要因を踏まえた対応例を示す。

ア 認知的要因への対応例

【事例の概要】

中学1年生のAは、テストでは、90点以上をとらなければ意味がないという思いを強くもっているため、テストの結果に悩むことが多い。

【指導・援助の方針】

- 90点以上でなければ意味がないという思い込みを修正する。(___部)
- これまでに、努力してきたプロセスと結果の価値に目を向けさせる。(~~~~~部)

【面談例】

教諭：「午前中、何か元気がなかったけど、心配なことでもあるんじゃないか？」
A：「返ってきたテストが悪くて…。」
教諭：「そうか…結果が気になっていたんだね。」
A：「はい…。」
教諭：「でも確か君は、今回のテスト全教科80点以上あったと思うけど？」
A：「私、80点台じゃ駄目なんです。90点以上じゃないと意味ない…。」
教諭：「うーん。90点以上じゃないと意味がないと思っているんだ。」
A：「…。」
教諭：「本当に意味ないんだろうか…？」
A：「…。」
教諭：「今回のテスト、全教科80点台をとるのにも相当がんばったと思うけど、それも意味がない？」
A：「…。確かに、すべてに意味がないとは思っていませんけど…。」
教諭：「そうだよ。私は、まず、そうやって90点以上を目指して努力した君が、えらいなと思ったんだ。そして、その努力の結果である全教科80点台もたいしたもんだと思うんだよ。」

イ 情緒的要因への対応例

【事例の概要】

小学6年生のBは、授業への参加意欲を示さず、学校では、元気がなく、いつもつまらなさそうにしている。

【指導・援助の方針】

- 本人の得意分野の社会をきっかけに、他の学習への意欲を喚起する。(___部)

【面談例】

教諭：「最近、元気ないんじゃないか？」
B：「だって、学校、つまらないよ。」
教諭：「うーん。学校つまらないかあ…。」
B：「僕、勉強大嫌いだし…。」
教諭：「そう…勉強がなあ。あれ？そういえば、さっきの社会の時間、何人かに発表してもらったけど、君の予習ノート、とても詳しく書いてあったね？」
B：「…。ただ、元々そういうの好きだから自分でも本で調べた…。」
教諭：「そうなんだ。先生も知らないことが書いてあってびっくりしたよ。」
B：「…。」
教諭：「たぶんクラスみんなもあれをしたら驚くと思うなあ…。あのノート先生にもう一回見せてくれないかな？」
B：「…。もう少し書き足してから、後で持っていきます…。」

ウ 行動的要因への対応例

【事例の概要】

高校1年生のCは、いつも宿題が終わらず悩んでいた。そこで、一週間の家庭での時間の使い方を記録するよう指示をしていた。

【指導・援助の方針】

- 時間の使い方を振り返らせ、効率よく使うことの大切さに気付かせる。(___部)

【面談例】

教諭：「記録をつけてみてどんなことに気付いたかな？」
C：「結構、無駄な時間が多いかも…。」
教諭：「そう…。それで、どのくらい無駄な時間があったのかな？」
C：「帰宅してから勉強をするまでの2時間くらいがいつも無駄ですかね…。」
教諭：「じゃ、次の一週間は、その2時間を何とか有効に使う作戦を立てて、チャレンジしてみたらどう？」

(2) チームによる対応

様々な要因が複合し、学習に苦戦している児童生徒が、不適応行動を起こすなど、担任一人での対応が困難な場合は、複数の援助者が、共通の援助方針をもって指導・援助を行うことが必要である。

次に、石隈・田村式援助チームシートを活用した指導・援助例について示す（図2）。

学年・組 生徒氏名 担任氏名		2年○組○番 ○○○○ △△△△	学習面 (学習状況) (学習スタイル) (学習) など	心理・社会面 (情緒面) (ストレス対処スタイル) (人間関係) など	進路面 (得意なことや趣味) (将来の夢や計画) (進路希望) など	健康面 (健康状況) (身体面の様子) など
情報の まとめ	(A)いいところ 子どもの自助資源	・ 体育が得意	・ 幼い弟の面倒をよく見る	・ 野球が好き ・ 模型製作が得意	・ 体力がある	
	(B)気になるところ 援助が必要なところ	・ 授業中騒ぐ ・ 全教科学力不振	・ 日常的にイライラしている	・ 進路目標がない	・ 夜ふかしによる睡眠不足	
	(C)してみたこと 今まで行った、あるいは、今行っている援助など	・ 前担任からの情報収集 ・ 担任から学年部への協力依頼	・ 授業態度について何度も注意した(担任・教科担)	・ 特になし	・ 保護者への協力依頼	
援助方針	(D)この時点での目標と援助方針	1 Dと教師との温かい人間関係づくりに努める 2 教育相談によって、Dの心理的安定を図る 3 個別指導等による学習面のサポートを行う				
援助	(E)これからの援助で何を行うか	① 授業での声かけ等のサポートをする ② Dに応じた学習課題を与える	① 教育相談を定期的に行いながら、Dの話を聴く ② ストレスの対処法を教える	① 野球や模型の話題をきっかけに、進路について考えさせ、自己の可能性に気付かせる	① 生活習慣を改善する必要性に気付かせる ② 保護者と定期的に連絡を取る	
	(F)誰が行うか	①② 教科担任	① 担任 ② 教育相談担当	① 進路指導担当 ① 部活動顧問	① 養護教諭 ② 担任	
	(G)いつからいつまで行うか	①②教科担任への依頼後～2学期末	①来週～(週1回) ②来週～(月1回)	①10月中(各1回)	①2学期中(1回) ②来週～2学期末	

(「石隈・田村式援助チームシート」を参考に作成)

図2 学習に苦戦するDへのチームによる対応

児童生徒が学習に苦戦する要因は、必ずしも本人にあるとは限らない。

たとえば、学級全体が落ち着かない雰囲気であることや、教師とのラポートがうまくとれていないなどの学習環境に関する要因や、家庭環境にかかる要因も考えられる。

学校においては、担任だけでなく、より多くの教師が、それぞれの立場から児童生徒の

姿を多面的にとらえて情報を共有し、学習に苦戦する児童生徒を早期に指導・援助していく指導体制を確立させることが大切である。

【引用・参考文献】

・ 國分康孝・國分久子監修『学習に苦戦する子』 2003 図書文化
 ・ 石隈利紀・田村節子著『石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門』 2003 図書文化
 ・ 飯塚俊編『小学校場面別・タイプ別言葉かけ集A～Z』 1998 図書文化

(教育相談課)